

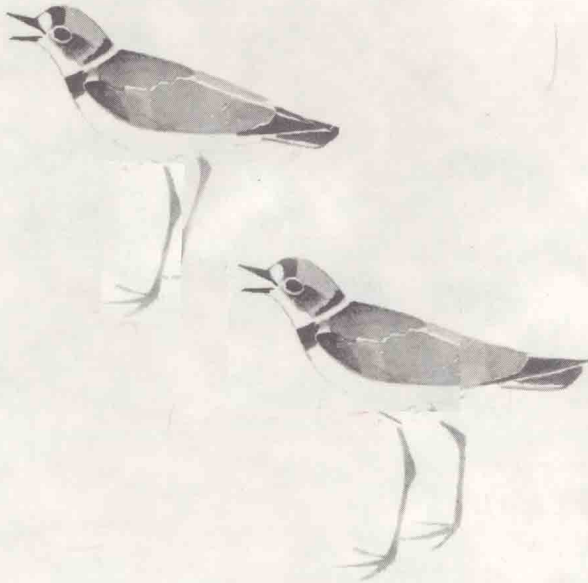
三浦綾子

嵐吹く時も



三浦綾子

嵐吹く時も



〈検印省略〉

嵐吹く時も

昭和六十一年八月三十日 第一刷発行
昭和六十一年十月三十日 第二刷発行

定価／一四〇〇円

著者／三浦綾子

発行者／石川晴彦

発行所／株式会社主婦の友社

東京都千代田区神田駿河台二ノ九

郵便番号 一〇一

振替 東京二一八七五二七番

電話 東京(03)二九四一一二二九(編集)
(03)二九四一一二三三(販売)

もし落丁、乱丁、その他不良な品がありましたら、おとりかえします。お買い求めの書店か本社へお申してください。

印刷／凸版印刷株式会社

嵐吹く時も●三浦綾子

目次

一	眉毛島	6
二	着付師	18
三	戸籍謄本	44
四	「荒城の月」	70
五	湯けむり	83
六	目黒不動	109
七	位牌	122
八	曲り角	148
九	二重回し	186

十	新聞	212
十一	火の粉	238
十二	八一旅館	263
十三	置手紙	289
十四	ひと昔	308
十五	人妻	321
十六	回轉木馬	332
十七	ほくろ	345
十八	佐渡の夕日	366
	あとがき	380

装丁

上村淳之

口絵

小松久子



眉毛島

一

志津代は茶の間の畳の上で浴衣の膝を崩して、ひとりお弾はじきをして遊んでいる。血色のよい指が、薄青いガラスのお弾はじきを弾く時、母親似の黒目勝ちの目に、利かん気がちらりと走る。首を傾ける度に揺れるおかつぱ頭の髪の毛の豊かさ、母のふじ乃に似ていた。

ひと間置いた台所のほうで、昼食の後始末をしている勝手働きのミネとサイの話し声が食器のふれ合う音にまじって、途切れ途切れに聞えてくるのも暑苦しい。

「宿屋のさあ、山形屋のさあ、お内儀さんが……」

「……へえ、あの人がねえ……」

少しきんきんと高い声は、今年十八歳のミネで、ややかすれた声は、一昨年の秋、漁に出た夫を嵐で失ったサ

イである。

この苦幌村で、唯一軒日用荒物雜貨、食料、衣料品を扱う志津代の家中（カネナカ）には、父中津順平、母ふじ乃、一人娘の志津代、そして大番頭、中番頭、小僧、女中のサイとミネ、合わせて常時十人はいる。その上、臨時の手伝いの男や女が、入れ替り立ち替り二、三人はいたから、食器の数も少なくない。しかも食事時にこの家を訪れる者は、役場の書記であれ、網元の使い走りの者であれ、ふじ乃の、

「さ、遠慮は無用、食べたり食べたり」

の気さくな言葉につい誘われて、ぴかぴかに拭きこんだ板の間に並べられた箱膳の前に坐ってしまうから、尚のことだ。

ダシを充分に取ったこの家の味噌汁の味は格別で、どんぶりに山と盛られた胡瓜や茄子の糠味噌漬もうまかったが、何より秋田から直送の米がうまかった。ふだんは麦飯ばかりで、白米など盆か正月にしか食えぬ者もあったから、甲の食事は大ごつおとうと喜ぶ者もいた。

「鄙ひんには稀」という言葉がある。しかしふじ乃は東京や京都に行ったとしても、尚稀と言える器量であった。特

に黒目勝ちのその目はいつも情をふくんでややうるみ、じつと見つめられでもしようものなら、男たちはうろたえて、つい視線を外してしまうのだった。ふじ乃は立っても坐っても、体の線が美しく、すつきりと結い上げた丸鬘姿で只店に立っているだけで、「まあ、絵姿みたい」と、女客たちも惚れ惚れするのだった。

飯時に毎日幾人かの客があるのは、このふじ乃と言葉を交わしたい者が多いためかも知れなかった。このふじ乃に、一人娘の志津代は「瓜二つ」と言われたが、志津代はどちらかと言えば、母親より父親の順平が好きだった。

中津順平はふじ乃より十四歳年上の四十四歳で、恰幅かつぶのよい男であった。目が細いというただでなく、順平は誰にも温厚な印象を与えた。順平は明治十一年十六歳で、唯一人郷里の佐渡、真野村を出、北海道に渡って呉服物の行商をした。その行商で資金を得、この日本海岸の、眉毛島と呼ばれる天売・焼尻やけしりの島の目近に見える苦幌くぼりに店を持った。嫁も娶らず働きつづけて、同じ郷里からふじ乃を迎えたのは、今から十二年前のことである。目のさめるような、しかも十四も年下のふじ乃をこ

の村に連れて来た時、人々は驚きのあまり、「狐に欺されたようだ」と言い合った。勤勉一途の、酒も煙草もたしなめ順平と、あでやかなふじ乃との取合わせは、村人には未だに得心がいかない。こんなにきれいな若い娘を蝦夷くんだりまで嫁に出す親が、この世にいるとは思えない。もしかしたら、どこかの芸者を落籍させたのではないかと疑ぐる者もいたが、ふじ乃には芸者をしたらしいふうもない。ふじ乃は結構こまめに働いて順平を助け、今では間口七間、奥行五間の店舗を持ち、つづいてその裏に、間口同じく五間、奥行八間の住居を構え、更に裏庭に白壁の土蔵を三つも持つ大店おほだなに築き上げていた。沿岸でも有数の鰺にしんの漁場を持つ苦幌に、いち早く目をつけた順平の慧眼と、骨身惜しまぬ実直さと、誰に対しても頭の低い温厚な人柄と、そしてふじ乃の協力と、それら一切が渾然としてこの成功を見たのであろう。

「その気になりゃあ、巾には苦幌の土地一坪残らず買い占める金がある筈だ」

村人たちが嫉妬ではなしに讃嘆してさきやき合うほどの商いであった。事実、順平が苦幌に持つ土地は少なくなく、「巾の旦那は他人の土地を通らずに、どこへでも

行けるんだから大したもんだ」とさえ言われた。また海

産干場（かば）と言つて、海の地主とも言える権利を幾箇所も持つてい、そこからの上りも大きかった。それでいて人々が、順平をほめこそすれ陰口を叩くことのないのは、その人柄の故であることはむろんだが、時に応じて惜しみなく、金も物も散らすからであつた。苦幌の小学校に、この辺りでは見られぬ大きなオルガンを寄贈したのも、神社の改修に進んで多額の寄進をしたのも順平だつた。歳末の景品には、どんな買物客にも白米一升を公平に贈つて喜ばれた。

それに輪をかけたように気前のよいのがふじ乃で、白米一升の景品も実はふじ乃の発案だろうと噂をされた。ふじ乃は子供が親の使いで買物に來ると、必ず飴玉の一つや二つは駄賃に紙にくるんで持たせたり、客が貧乏の苦勞話を始めると、「それは、それは……」とすぐに涙ぐみ、着ている羽織を持たせて帰すなどは朝飯前で、時には布団を背負わせて帰すことさえあつた。

但し、ふじ乃は涙もろくもあつたが、生來氣性が激しく、一旦何か氣に入らぬことがあると、

「生意氣言うんじゃないよ。それなら、あの布団を返し

なよ」

と責め立て、ちよつとやそつとの詫びには耳を傾けなかった。だがその叱られた者が布団を背負つて、しょんぼりやつて來たりすると、

「馬鹿だねえ。本氣にして返しに來る者がいるものか」

と、伝法に言つて、屈託なく笑うふじ乃でもあつた。このように、時として人々はふじ乃にふりまわされることはあつたが、それでも順平よりふじ乃に人氣があつた。順平は信賴され尊敬される対象だつたが、冗談を叩く相手というわけにはいかなかった。ただ、一人娘の志津代が母より父になつて、その大きなあぐらの中に、数えて十一歳にもなつた今でも、毎日すぽんと、そのかわい尻を落した。が、母のふじ乃の膝に、志津代は絶えて坐つたことがない。

それでも、毎朝志津代の髪を梳（か）いてくれるのはふじ乃で、肩までの豊かな髪を、ふじ乃はその日その日の氣の向くままに、ある時はおかっぱ頭に、ある時は頭の上に饅頭ほどに小さな髷を結つてくれたりした。そして時には志津代の肩を抱いて、鏡台に映る志津代に、

「あのね、女という者はね、髪を乱してならんのよ。髪

の乱れは、心の乱れと言うからね」

と、言つて聞かせてくれるのだった。以前は志津代にはその言葉がよくわからなかった。そのうちに、髪かみの乱れという言葉はわかるようになった。が、心の乱れという言葉がわかったのは、十歳になった去年の頃からで、ふじ乃が大声で、

「あの上げた角巻をお返し！ この恩知らずが！」

などと、漁師の女房を罵るのを見たりすると、

（あれが心の乱れというのじゃないかしらん）

と、志津代は心のうちに呟くようになった。父の順平は心の乱れなど見せたことがないのに、母の乱れはひと月に二、三度は見える。それでいてふじ乃は、

「髪かみの乱れは心の乱れと言うからねえ」

と、時折鏡の中でにつこりと笑いかけるのだ。その笑顔えんごを、わが母ながら美しいと志津代は思う。だがこの頃は、ふじ乃は不意に淋しい目になって黙りこみ、志津代の髪かみをいつまでもいつまでも梳きつづけていたりする。そんな時、志津代自身もひどく淋しい気持ちになる。何かはわからぬが、妙に不安にかられてくる。実はそんな時こそ、ふじ乃の心に乱れるものがあるのだが、十一歳の

志津代にはまだわからぬことであつた。

髪かみと言へば、ふじ乃自身の丸髻まるびしは、何日かに一度髪結のおふみが、道具を入れた四角いブリキの箱を下げて来て結い上げる。そして次に結い上げるまでの毎日まいにちは、おふみが毎朝撫なでつけに来るのだった。このふじ乃の、風呂場で髪かみを洗っている時の姿が、志津代は好きだ。志津代の髪かみよりも何倍も長いその黒髪くろかみを、平たい桶おけの湯の中に泳がせ、真つ白な二の腕うでを上げて洗っている姿は、全く見事な大人の女の姿であつた。

「……山形屋の文治さんは、よう勉強が出来るかね」

「んだ……。顔かほは見たらわかる。ありゃかしい顔だもね」

九州出身のサイと、秋田出身のミネが、それぞれの国なまりで、まだ山形屋の噂うわさをしている。

山形屋の次男西館文治は、鼻筋はなすぢが通つていて眉まゆが凜々しく、いかにも利発りぱつに見える。いや、山形屋で鼻筋はなすぢが通つて賢さとしげに見えるのは、文治だけではない。長男の恭一、三男の哲三も、似た顔立ちだ。それぞれ数年前死んだ父親の長吉ながきち似なのだ。

上背のある長吉は、その立派な体格にふさわしい顔立

ちをしていた。濃い一直線の眉、深みのある大きな目、きりりとしまった唇、それらが高い鼻に調和していた。今から十八年前の春、長吉は苦幌にぶらりとやって来た。紺の半纏姿に、風呂敷包みを一つぶら下げただけの、風来坊のような風体だったが、その顔には品格が滲み出ている、武家の出ではないかと誰もが思った。長吉は、旅人宿の山形屋に投宿した。山形屋の客は旅商人がほとんどだった。網元に網を売る商人、越中富山の置薬屋、呉服小間物の行商人などが、一日二日と泊るのが常で、三日も滞在する客は珍しい。当然長吉も一日二日で立ち去るものと思われたが、長吉は幾日経っても苦幌を出て行く様子がなかった。一日中部屋に閉じこもって酒を飲んでいるかと思うと、浜に出て、半日も腰をおろしたまま海を眺めていたりもした。風体から言って、そんなに金を持っているとは思えない。人々は山形屋がひどい目に遭わねばよいと危ぶんだのも無理はない。

ところがこの長吉に、亭主の竜造が惚れこんだ。もともと竜造夫婦には子供がなかった。今いる跡取り娘のキワは、五歳の時にもらった養女である。キワは秋田の貧しい農家に生れたが、貧しさに耐えかねた親が、キワを

置き去りにして北海道に逃げた。哀れに思った近所の者が、旅の序にキワを連れて、その親を探しに来てくれた。が、広い北海道のこととて両親の行方は皆目つかめない。キワはこの山形屋に、連れの者と共に泊り、子供のない竜造夫婦の情を得て、養女に迎えられた。人のよい竜造夫婦に可愛がられたキワは、控え目な氣立てのよい娘に育った。

このキワと長吉が、突如夫婦の盃を交わしたのは、長吉が現れてひと月経つか経たぬ頃だった。

「山形屋の人のいいのにも程がある」

村人たちは驚き呆れた。

「なあに、今に出て行くさ」

「身代根こそぎ持って行かれるかも知れんぞ」

人々は、ハラハラと長吉の挙動に注目した。婿となっても、長吉は格別働くふうはなかった。さすがに朝から酒を飲むことはやめたが、海べで半日ぼんやりと過す長吉の姿を人々は見た。だが、今に逃げると思っていた村人たちを裏切って、長吉は山形屋にとどまっていた。

「あれじゃ、まるで飲み食いはい、その上娘も只だ。とんだ奴に山形屋も取りつかれたものだ」

長嘆息をする人々に、突如思いがけぬことが起きた。それは貧弱な山形屋の玄関の改造が始まり、広いがっしりとした風呂場の別棟を建てて、見た目にも、ちょっとした町の宿屋のように変えてしまったことである。しかも、その金を出したのは、何と長吉だという話であった。人々の長吉に対するまなざしが変わった頃、長吉には漢文の素養があることが知られ、

「エゲレス語まで出来るんだとよ」

という噂さえ立った。いつの間にか村の若者たちが山形屋に集まって、政治の話などを長吉から聞く頃には、「山形屋の若旦那」と、誰もが、一目置くようになっていた。氣立てのよいキワとの夫婦仲もよく、恭一、文治、哲三と、男ばかり三人の子をあげた。志津代の父中津順平とも、長吉は親しく行き来して、碁や将棋の友でもあった。将棋の腕は長吉のほうが上だが、碁は順平が強かった。一時期は兄弟のように親しかったが、その二人の間にこんなことがあった。

順平は毎年、盆には生れ故郷の佐渡に帰る。その年も順平は佐渡の土産を数々持って苦幌に戻って来た。佐渡は真野の生れである順平の誇りは、家紋であった。順平

の家紋は順徳天皇拝領の丸に橘の紋である。順平の実家は桶屋で、父は桶作りの名人と言われた。その先の先祖のことはわからないが、天皇から紋をもらっているくらいだから、何か功があったにちがいない。京都から、あるいは順徳天皇に従って来た供の一人かも知れぬと想像された。何れにせよ、順平にとって順徳天皇は只の天皇ではなかった。故郷の真野宮には順徳天皇が祀られており、また同じ真野の中に陵があり、天皇が植えたという梅の古木もあった。幼い時からそんな中に育った順平にとって、それらはすべて大いなる誇りであった。

ふだんは口数の少ない順平だったが、その日は佐渡から戻った喜びもあって、訪ねて来た長吉や、妻のふじ乃や、大番頭の片山嘉助に楽しげに土産話をしていた。そして、真野の寺の僧が書いてくれたという短冊を取り出して見せた。

いざさらば磯打つ波にこと問はむ

沖の方には何事かある

この御製を真野の村人は知らぬ者がない。後鳥羽上皇が隠岐に移されたと聞いて、佐渡に流された順徳天皇が案じて詠んだ歌である。「沖の方」は「隠岐の方」にか

けた言葉だ。長吉は短冊を受け取って、その達筆をすらすらと読み下し、

「ああ、後鳥羽上皇が隠岐に流された時のあの歌だな」と呟いた。

「さすがは山形屋の若旦那だ。これは、ちょっとやそつとで読める字ではない」

順平は感嘆して言い、

「住職が二枚書いてくれた。一枚は山形屋さん、あんたに上げよう」

と、満面に笑みを浮かべて言った。が、長吉は、「ありがたいが……山形屋なんぞにはもったいないからねえ」

そっけなく短冊を順平の手に返した。いや、単にそっけないだけではなかった。その時、長吉が鼻先で笑ったように、順平にもふじ乃にも見えた。あとで番頭の嘉助も同じことを言っていたから、これは気のせいではなかった。「仏の中」と言われる順平だが、この時ばかりはむっとした。順平としては、事自分のことではない。村人が誇りとしている順徳天皇に関わることである。長吉はその順平の表情に目を注めて、帰って行った。

長吉が帰ったあと、順平はふじ乃に言った。

「あの男の正体は何だろうな」

徳川幕府が三百年つづいて、明治維新となった。それからまだ四十年と経ってはいない。依然として徳川方に心を寄せている者たちも少なくはない。空知集治監や樺戸集治監には自由民権の国事犯も数多く繋がれていた。

「何れにしろ、危険な男だ」

順平は呟いた。

そんなことがあって、いつとはなしに長吉と順平の間に溝が出来、行き来も間遠になった頃、長吉は突如一夜の腹痛で死んだ。食中毒とも、腸捻転ともわからぬが、激しい痛みであった。ころげまわりながら、長吉は、

「キワ、キワ」

と呼んだ。何か言いたげであった。キワが長吉の肩をおさえて唇に耳を寄せると、

「わしの名は……長吉ではない……」

と、辛うじて言った。思いがけぬ言葉だった。

「わしは……山形の佐藤文……」

と、尚も口を動かしたが、またしても襲った激痛にころげまわり、やがてこと切れた。その場に居合わせた、

その時十歳の恭一は、「佐藤軍之進」と言ったと言ひ、二歳年下の文治は「文之助」と聞いたと言ひ張った。これが村人の口から口に伝わり、

「山形屋のキワは、名前も知らぬ男に、三人も子供を生まされて」

と笑う者もい、同情する者もあった。

長吉の死後意外なことがわかった。長吉はキワの婿となって益は交わしたが、入籍はしていなかったのである。恭一、文治、哲三の三人は、何れもキワの私生児として届けられていた。式は挙げて、直ちに入籍する者などほとんどない時代で、わが子が生れても、三カ月や半年遅れて届け出ることなど珍しくなかった。とは言つても、長吉の場合、何か理由があったにちがいないと、竜造夫婦は気がついた。頼母しい男ではあったが影があった。本名をいまわの際まで、妻にも子にも知らせることの出来ない深い理由があったにちがいないと、竜造夫婦はそのことが心にかかつて鬱々としていた。悪いことはつづくもので、竜造夫婦は長吉の死んだ翌年、二カ月置きにこの世を去った。

二

以来、キワは三人の子を抱えて、山形屋を守つて来たが、山形屋と甲の間に出来た溝は長吉が死んでも何とはなしに残つていて、甲の使用人たちは、表立つて山形屋の噂をすることさえ憚かった。中には、山形屋の子供たちを見ると、露骨にいやな顔を見せる小僧もいた。

「どこの馬の骨かわからぬ者の子供」

との侮蔑感が、つい顔に出るらしかった。が、キワも子供たちも甲に買物に行かぬわけにはいかない。日用雑貨、荒物、食料品等を一手に扱う店が、苦幌村には他になかったからである。

苦幌村の集落は、海岸の漁師たちがつくる浜べの家並と、山の手の市街から成っていた。山の手には小学校、寺、神社、役場、医院、風呂屋、床屋、畳屋などがあり、教師や吏員、産婆、大工などが住んでいた。山形屋もこの市街地にあり、後に鉄道が敷かれた時、駅もこの山の手に置かれた。

志津代の家甲は浜にあった。山の手の台地からゆるやかな崖を斜めに道を下りて来ると、すぐ崖下に甲の白壁

の蔵が三つ並んでいた。この蔵を見ると苦悩の人々は、「蔵の三つもあるでっかい店のある村」に住んでいる幸せに似た感情を覚えた。甲はそんな頼母しさを感じさせる店だった。

間口七間、奥行五間の店の、半分は土間で、半分は畳敷になってい、この一段高い畳敷に、子供以外の客たちは腰をかけて、世間話をしながら、ゆっくりと買物をする。土間には塩、醤油、酒、油、黒砂糖などの樽や叭が置いてあり、酒や醤油や油は升売りをしていた。下駄、地下足袋、座敷簀、庭簀、はたき、桶、ざる、赤、白、黄、黒などの縫糸などが、あるいは吊るされ、あるいは立てかけられてある。更に畳の上に造られた棚には反物、布地、半纏などが整然と置かれ、鉛筆、ノート、煎餅、飴玉、駄菓子、マツチ、石鹼などの所狭しと並べられた一角もある。とにかくどこを見ても品物があふれていて、この店に入っただけで、子供も大人も心楽しくなるのだった。

だが、甲の一人娘志津代だけは、買物の楽しさを知らなかった。それだけに志津代は、買物に来る子供たちを見ると、羨望のまなざしになる。志津代は、買いに行か

ずとも欲しい物は何でも自分の店で手に入る。但し、客たちのように時間をかけて、品物を物色する余裕は、志津代には許されていなかった。

「さ、邪魔になるから」

と、早々に追い立てられ、何が店にあるのかさえ、ゆっくり眺める暇がない。で、志津代は時折そっと店をのぞくことがある。家屋の左手には一間幅の土間の廊下が、表から裏まで突きぬけている。今日のような暑い日には、この細長い廊下の両端の出入口の戸を開けると、浜風が吹きぬけて、ひんやりと肌に快い。今も、お遊びに飽きた志津代は、お弾きを小箱に入れて、紫檀の茶ダンスの上に置くと、廊下の土間に下り立った。風が素足の足もとに心地よくふれる。サイとミネは、昼食の後始末を終えて、裏の島にでも出かけたのか、台所はひっそりとしている。山の上から、^{かたひ}寛で引いて来る水の、水桶に流れ落ちる音がひそやかに聞えてくるだけだ。

志津代は赤い緒の草履を突っかけて、店のほうに歩いて行った。この土間の廊下と店の間を仕切る板戸がある。その板戸を志津代はそっと開けた。客の姿はなかった。帳場には父の順平が坐って算盤を弾いてい、母のふ